

Keynote Lecture

02

基調講演録

[ここから未来] 出版記念シンポジウム
2018年8月4日(土) 港区人権ライブラリー

Ver.1.0

『クリスマスの物語』から読み解いた
篠原真矢さんの自死の背景

基調講演 渡邊 信二

元・川崎いじめ自死調査委員会

現・川崎市立東菅小学校総括教諭



この基調講演録は、2018年8月4日(土)に
東京都港区の人権ライブラリーで開催した
[ここから未来]ブックレット出版記念シンポジウム
「もしかして、いじめ?そのとき保護者ができることは?」の
基調講演を採録したものです。
基調講演のスピーカーは、元・川崎いじめ自死調査委員会
現・川崎市立東菅小学校総括教諭の渡邊信二さんです。
渡邊さんの当日の発言をもとに、
見出しを加えるなどして冊子にまとめました。

※この講演録は、神奈川こども未来ファンドの助成金を
活用して作成しています。

『クリスマスの物語』から読み解いた 篠原真矢さんの自死の背景

これを話すことがあなたの使命だ

皆さん、こんにちは。私は渡邊信二と申しまして、川崎市多摩区の東菅小学校に勤務しています。篠原真矢さんが通っていた南菅中学校は、小高い丘の上にあるんですが、僕の小学校はその麓にあるということで、これも何かのご縁ですけれども、僕はそこに勤めることになったんです。

今日この会があるとお聞きして、実は……と篠原さんからお話があったのが6月でしたね。真矢さんの命日が過ぎて、連絡がありまして。ちょっとお話したいことがあるんだなんて、なかなか本題に入らないんですよ、お二人とも。でも僕はだいたい分かってたんですけど、分かってないフリして。こんな感じで困惑した顔して。そしたら、実は8月4日に会があるので、最初に話をしてもらえないかというお願いでした。

最初は僕が断ると思ったんですって。というのは、僕がいろいろな原稿とか新聞とかに出てくるときってというのは、「教育委員会の2人」っていう言い方だったんですね。ずっとね。でも8月4日のときには、名前が出ますよということでした。もう8年経ちました。すぐに所属長の学校長に電話しました。すぐに「あなたの使命だ」と言われました。

「これを話すことが。そこに行くことがあなたの使命だ」と言われました。非常に心強いことだったので、すぐに折り返し返事をしましたね。そんな経緯があります。

2010年の6月7日当時、僕は川崎市教育委員会の学校教育部というところにおりました。多摩区の教育担当として、指導主事をやっ

ていました。小学校担当の指導主事ですが、中学校の事案であっても経験が大事だということから、僕が調査委員会を担当することになりました。

その日のことはハッキリ覚えています。僕は「読書のまち川崎」という授業をやっていて、それで確か教育会館という南武線の向河原の駅から徒歩5分くらいの建物にいました。とても穏やかな天気で、本の話をしたり、読書教育の話をしたりして、話がかかなり盛り上がりたり、まとまったりしたなあと思った夕方頃、もう一人の中学の指導主事から連絡があって、一人の生徒さんがご自宅で亡くなったという話を聞きました。もちろん、その生徒さんと僕は個人的に面識はなかった訳ですし、会ったこともなかったけど、聞いてびっくりしました。当たり前です。もし、自分の家族だったらと思いました。

僕が他の人よりも、ちょびっとだけ自慢できるのは、もし自分がその立場だったらとか、もし自分が……という風に、何か置き換えることが少し得意なのかなって気がしますね。それ以外はほとんど自慢できない。顔が少し



ハンサムなところぐらいですかね(笑)。あと、つまらない駄洒落を授業中に3発くらい連発して生徒のひんしゆくを買うというくらいですが。今日はテーマがこのようなテーマですから、くだらない冗談は言わないように控えたいと思います。5回以内に控えたいと思います。「ゼロじゃないのかよ」っていう批判が聞こえてきそうですが(笑)。



『クリスマスの物語』との出会い

2009年12月17日に、篠原真矢さんが2年生のクラスで、「3分スピーチ」の限られた時間の中で、自分で作った物語を読んだんです。この物語は、調査報告書にも載せました。「ここから未来」のホームページからもダウンロードできるので、ぜひ読んでいただければと思います。

この物語、僕も最初全然知らなかったんですけど、調査で真矢さんの同級生と面談しているときに、存在が分かりました。

真矢さんは「遺書」と「遺言」の二つを残してたんですね。それで、この二つを僕は何十回も繰り返して読みました。その第一印象は、言葉の使い方が独特だということでした、いい意味で。引用が上手で、本を読んだりすると影響を受けやすい、僕と同じだなと思いました。

僕はメモ魔なんで、感動した映画のセリフとか読んだ小説とか、こういうノートにメモして、すぐにこんなに分厚くなっちゃうんですよ。

真矢さんも書き留めたのかなと想像したんですよね。あとでもう一回見直して、何か使ったり引用したりしますよね。そんなことしたりする子なのかなって想像しました。

そんなことがあったので、中学校の同級生に面接するとき、「真矢さんて、こういう持ち味があったんじゃないかって思ってるんだけど、君はそういうエピソード知らない?」とか、「何かクラスとか授業の場面で、彼が彼らしい表現をしている場面に出会わなかった?」っていう質問を絶えずしたんですね。これはとても重要な質問だったと、今も思ってますけど、そしたらある子がハッと思い出したように「家にそういえばメモがあるんです」って言ったんです。「何のメモ?」って言ったら「3分スピーチのときにシノ(真矢さん)が自分で作った物語を読んだんですよ。そのメモを僕にくれたんですよ」って言って。「それ、君、今もあるかい?」って聞いたら「あるよ」って。「じゃあ僕と二回も会いたくないかもしれないけど、もう一回会いに来てくれないかい?」って言ったら、「いいよ」って持ってきてくれた。それがこの『クリスマスの物語』なんです。

最初、本人が読んだときクラスが笑ったっていうの。なぜだと思います?「いじられキャラ」だから。「いじられキャラ」っていうレッテルを貼られてたからです。だから「またシノが面白いことやったぜ」っていうような先入観が先に走るんです。だから内容よりも、誰が言ってるかということの方がウェイトが大きいです。

例えば明日、日曜日に「サンデーモーニング」という番組がありますよね。途中でスポーツコーナーが出てきまして、張本勲さんという素晴らしいバッターが出てきますが、もうSNSではあの人ミスらないかどうか待ち構えてる人がいるそうですよ。「また言ったぜ」って炎上させるために生きてる人々がいるすか

らね。誰が言ったからじゃない。張本さんが言ったってことが大事なんです。僕が言っても、あんなに炎上しない。同じなんです、やることがぎっと。

読みます。

『クリスマスの物語』

ある所に、二人の兄弟がいました。兄は16歳、弟は10歳の幼い兄弟です。

両親には、先立たれ、兄は弟を養うために、町外れの小さな鉄工所で毎日こつこつと働いていました。

弟はそんな兄を見て、「兄にだけは迷惑をかけたくない。」という気持ちを抱いていました。時期は冬、クリスマスの日が近づいていました。町は賑わい、子どもたちはおもちゃ屋に目が釘付けです。

弟も一瞬おもちゃに目を向けましたが、すぐに目をそらします。「兄にだけはこのことを知られてはいけない。」そう感じたからです。

しかし、兄はその姿を見ました。弟が毎年この時期になると、おもちゃ屋に目を向けるのを兄は知っていました。

弟は3歳の時に両親に先立たれたため、子守唄というのを知りませんでした。だから、オルゴールを欲しがっていました。

兄は、「今年こそは……」と密かに思っています。

でも、現実には、お金がなく、食べていけないのがやっとならぬ。兄は考え、ある手段を思いついたのです。

後日、兄は弟に、「今年はお前がよく我慢して良い子にしたからサンタさんが来るんだよ。」と言いました。

弟は首を傾げましたが、兄は続け、「信じて待っていれば必ず来るから。」と言いつつ、いつも通り仕事に行きました。

そして、クリスマスの日はやってきました。夜に仕事は終わり、帰りにおもちゃ屋に寄り、オルゴールを買って家に向かいました。

翌朝、弟は何かの音で目覚めました。目を向けてみると、まず、オルゴールが目に入りました。次に目に入ったのは横になっている兄の姿。

「ああ、帰って来たんだ。」

そう思いながら兄に触ってみました。

「冷たい。」

弟はつぶやくと、そのことを悟りました。兄は死んでいたのです。兄があの時とった手段……それは、自分の命を削ってまでお金を貯めてオルゴールを買うというものでした。

弟は、「そうだ、寝ているんだから子守唄を歌ってあげよう。」

そう言って、オルゴールに詩を乗せながら兄を見送りました。流した涙は海になり、やがて真っ白な鳥に変わりました。

普段、家族と過ごしている時や友人と一緒にいる時にこの話を思い出してみてください。

当たり前の日常がどんなに心温まる事か、それを感じて下さい。

これは、あるクリスマスソングの由来とされている話です。普通は恋人向けと思われるのですが、このように考えた人もいたのです。

この歌の冒頭部分の「雨は夜更け過ぎに雪へと変わるだろう」、あなたは思うでしょうか？それはあなた次第です。

**当たり前の日常が
どんなに心温まることか
それを感じてください。**

『クリスマスの兄弟の物語』より

読まれることのなかった7行のメッセージ

こういう話です。真矢さんが中2のときに作ったんですよ。これ、本人が読んだら笑いが出たんですって。笑える話じゃないでしょ？なぜ笑ったか。彼が「いじられキャラ」のレッテルを貼られたからです。もし僕がこの教室にいたら「ちょっと、おいおい。何で笑うの？その笑って何？スマイル？それとも嘲笑？あざ笑うってこと？」って、彼から僕は原稿を奪い取って、もう一度。合唱コンの練習があるかもしれないけど。部活に慌てて行こうとしている生徒がいるかもしれないけど。3分スピーチだから180秒ってきまりがあるかもしれないけど。そんなことお構いなしに、今のように生徒の前で朗読したでしょう。そしてこう問います。「この話は、笑う話でしたか？なぜ笑ったの？この物語に対して？それとも読んでいた人に対して？」と言います。

子どもたちは、ある感覚に慣れると、特に教室は、それが当たり前になってきます。多数決になると、それが正義になります。そうすると、モノの判断が鈍ります。それが正しいのか、正しくないのか。いや、正しい、正しくないってどうか。それが人間の尊厳を傷つけるものなのか、そうでないのか。その判断が弱ります。

そのときに、学校の先生・教師は「ちょっと待てよ」と止めて、通訳者になってあげると良いと思うんです。今の笑いはどんな笑い？どんな質の笑い？ハッピーになる笑い？あなたが笑ったことで彼が幸せになる？あなた自身はどう？って問い直してあげないといけないと思います。どんなに忙しくても。それが学校教育に携わる者の責務だと僕は思います。「当たり前の日常がどんなに心温まることかそれを感じてください」

これを書いたのは真矢さんです。真矢さん

が望んでたのは、当たり前の日常です。誰かが誰かに脅かされたり、誰かの顔色を余計に見て自分の呼吸を乱してる。そんな生活じゃなかったはずですよ。3分スピーチだとしても、3分じゃ読めないですよ、これ。すると誰かが時間の管理をしていて「もう過ぎたよ」とか言って。

実はこの話、7行分読んでないんです、本人が。なぜか。笑われたから。最後のところなんか照れくさくて、もう読む気もなくなっただけでしょう。これは同級生が証言してるんですね、「彼は途中で読むのやめちゃった」って。ところが、「僕はその原稿を貰ったときにびっくりしたんだ」って。「まだ読んでないところがある、もったいない」って。

真矢さんが言いたかったことは、伝わらなかったんですね。先ほどの話と重なりますが、「誰が言ったのか」ということよりも「何を言ったのか」に視点変換させるのは、教育の使命だって思います。言った人が嫌いだから聞く気もしないこともあるでしょう。でも、その人が言ってる内容にも学ぶべきことがあるなら、素直に心開くべきだと僕は思います。僕自身もそう思って生きています。それを、まだ未熟な生徒さんたちに伝えるのは、年長者である教師の大切な命の使い方だと思います。

「遺書」と「遺言」を手がかりに調査を開始

さて、調査委員会ができました。まだいじめ防止対策推進法ができる前でしたね。手探りですが、教育委員会、学校関係者、それから地域、保護者、そして有識者という構成で、調査委員会が組まれました。有識者は、帝京大学病院の精神科の張賢徳（ちょうよしのり）先生です。今年、日本自殺予防学会の理事長になりました。この先生にいろいろ示唆をしていただきました。

最初の手がかりは「遺書」と「遺言」です。明らかに、個性的な言葉の使い方をする真矢さんですから、僕は良い意味で言ってるんですよ、引用する力に富んでいて、引用した言葉に自分の想いを重ねる力があると思います。もし僕が担任で通知表を書くなら、今の言葉は必ず外さないとしますね。それがあなたの持ち味だから、そこをもっと磨くべきだと。もつと言うと、あとでまた話に出てきますが、メモをちょこちょこ書かないで、一冊の本にメモは集約すべきだとアドバイスしたでしょうね。そうすれば、あなたの言葉集ができると。僕のよ



うに、こういうノートにしてね、と思います。

「遺書」と「遺言」を最初に見たのは、とても重要でした。なぜかと言ったら、僕は会ったことはないんですが、真矢さんてこんな人じゃないかな……って想像させてもらえるだけの、力をもってたんですね。読み手に「うーん」と思わせるような力が。

これもあとで話しますが、夢には何度か出てきてね。会いたかったんですよ、だから夢に出てくるんですよ。追いかけても逃げ足が速くてね。いつもギリギリまで引き付けて逃げるの。ずるいよね。野球やってるから、走りこんでるからって、調子に乗ってんじゃないよと本気で思ってたね。本気で、目覚めたときに怒ってる。「いい加減にしろよ！」って思ってた。でもいないんだ。うん、会ったことない

んですよ。でもすごいリアリティがあるの。不思議だね。会ったことないのに。

「遺書」と「遺言」を読んだから、さつきみたいに生徒さんと対話するときにですね、僕は「真矢さんて、こういう特徴があったと思うんだけど、そういうのって感じたことない？」っていうことが聞けたんです、具体的に。「そういう場面がなかった？」とか、「何か、彼らしい言葉の表現を聞いたことはない？」とか、そういう質問ができたんです。結構、答えてくれる生徒さんがいてね、具体的に。本当に同級生は協力してくれましたよ。でも、それも僕がいつも思ってたのは、僕に協力してくれたんじゃないの。真矢さんに協力してくれたの。そう思って話を聞いてました。だから僕は、真矢さんが付いてると思ったから、弱気が出たらいつも彼がいると思った。彼がいると。それで僕は、弱気をこっちに置きました。

それで、先生にも聞き取りましたが、転勤して異動して別の学校に行った先生にも、訪ねて聞きました。特に国語の先生には聞きました。言葉が出やすいでしょ。あと、真矢さんていうのは、話し言葉が不器用です、とても。でも、書いたときに、自分の心の中を見せる 때가結構あるって、またあとで出てきますが、分かるんですよ。だから話し言葉を鵜呑みにしてはならない。一番鵜呑みにしちゃいけないのは「大丈夫だ」という言葉。彼が「大丈夫」というときは、僕の息子もそうなんだけど、大丈夫じゃないですね。僕の息子もそう。「お前大丈夫か?」「大丈夫」。全然大丈夫じゃない。だからしつこいですよ、僕。大丈夫と言われたときは。「本当か?」「お父ちゃんの、祖先の祖先のまた祖先に誓っても大丈夫か?」「だ……大丈夫」。一回どもったでしょ、今。動揺が生まれてるの。そうやって何回か繰り返してね。目が動いたりね、視

線をそらしたりするのを見るんです。「今、目がキョロキョロしたけど、何かあるんじゃないのか？」って。嫌なやつですよ。家に帰ってからも学校の先生みたい(笑)。

真矢さんの書いたものをもっと読みたい

だから、僕は書いたものが読みたかったんです。聞き取りだけじゃ足りない。さっきの『クリスマスの物語』は奇跡的に出てきた。笑う物語じゃない。しかもお兄さんが犠牲になって、弟を幸せにしようと思ってるんだ。まさに真矢さんがやった人生そのものが、あの物語に投影してる。ところが、あれ一個だと言いきれないんです。だから、もっと欲しいんです、そういうのが。日記とかが読みたかった。どんな本を読んで影響されたか知りたかったんです。

でも言えなかったんです、なかなか。それで、張先生のアドバイスもあったんだけど、僕が逆の立場だったら、調査報告書が何か月か経ってできましたっていうまで、待てないと思ったの。だって、僕が生徒たちから対話して聞いているのを、宏明さんも、真紀さんも知ってるんだもん。だったら、途中ちよつとずつ話聞きたいと思うんじゃないかと思って。それで、週に一回くらいずつお家に行くことにしたんですよ。週末が多かったんですけど、土曜日か日曜日かのどちらかが多かったですね。ときどき平日もありましたけど。もう一人の僕の上司と二人で訪ねて。

こんなエピソードを聞きましたよとか。もちろん、いじめの事実があったかというのは大事なことから、そのこともやるんだけど、それだけじゃなくて、こんなことしてたんですよ。真矢さんって、人が見てないところで人助けを結構してるの。これがね、カッコいいんですよ。すごく不器用なんだけど、誰かのために汗流したりね。「俺も一緒に走ってやるよ」とか言って、一緒に走ってやったりね。損得で言

うと、どちらかという損することをやってるんだけど、そのことで、すごく助けられてるって思ってる子がいっぱいいるの。それは僕がたくさんの生徒から話を聞いてるから、共通して出てくる答えです。「あいつあんなことをやってくれたんです」「あいつバカばかりやってんだけど、人前だと。本当はそうじゃないんです」っていう同級生がいましたよ。僕はそれを聞いてると、僕自身が褒められてるような気がした。

僕は立場として教育委員会の仕事もあったし、それから調査委員会のメンバーだっというのがあったけど、途中で、どこかね、それとは別の僕が、ちゃんといたかな。で、それを自分の中で自覚することが、僕は人間として僕自身を見失わないってことだし、一番大事なことは何かってことを、迷子にならないための、僕のメンタルを整える一つのコツでした。

お家に行って話してるんだけど「お部屋の中にある日記とか、書いたものを読ませてもらえませんか？」って言い出せなかったのはね、凶々しいなと思って。書いてるもの読みたいな、読んでももの何だったのかな、どんな音楽聴いてたのかなっていうのが、知りたくてしょうがなかったの。僕の中に、もっと知りたいっていう願望が出てきたんですね。真矢さんが「どう生きたか」っていうこと。これね、生徒さんが亡くなってるから「死亡報告書」なんです。でも僕は嫌でね、心の中でサブテ

「部屋を全てみてください。

息子が

何を考えていたかを

調べてください。

お願いします。」

雄取宏明さん真紀さんの言葉より

マを付けた。それは「生き方報告書」。彼がどう生きたかっていうのを、僕は知りたかった。僕の心の中で、このテーマをちゃんと活かしてやったんです。だからこそ、書いてるもの、読んでるもの、聴いてるものが知りたかった。一番良いのは、部屋を見せて欲しかった。それでも言えなかったんです。

ついにチャンスの扉が開いた

ところが、あるときにお二人が「部屋をすべて見てください」って。「息子が何を考えてたかを調べてください」って言ったんです。「お願いします」って。「ええっ？本当に良いんですか？」って。でも、もう一つの気持ちを告白しちゃうとね、待ってましたと思ったの。僕、待ってたんだもん、このチャンスを。

「本当に良いんですか？」と言いながら「待ってました、どうもありがとうございます」って思ったんです。そして部屋に行きました。部屋は、亡くなった日、そのままですよ。布団も。掛け布団は、起きてそのままになって。枕元には本が置いてあったかな、確か。まだそこに住んでる本人がいるようでした。手が付けられないんだなって思った。あのままで、時が止まっているんだなと思いました。僕が入って良いのかな？と思いましたよ。でも、調べなきゃと思った。そして驚いたことに、「引き出しでも何でも全部見てください」って言われたの。

引き出しの中には、書きかけのラブレターとか、それからびっくりしたのは、真矢さんは、いろいろな詩を見て写す「視写」というのをやってたんです。これがたくさん出てきた。それがいったい何の詩を写してるのかが分からなかったんで、いろいろ調べたり読んだりして。あと歌詞が多かったんです。僕が全然聴いたことのない歌手の歌ね。分からなかったから CD 屋さんに行って調べたり、アマゾン

で注文したりして、全部買って聴いて。車の中は全部その音楽をいつもかけてて。もう歌えるくらいまで聴いたの。曲想が激しいので、歌詞がよく分からなかったんだけど、途中で聴くのをやめて歌詞だけ音読したりとかして。音読は良いですね、ああいうとき。声に出して、自分の声を聞いて、詩の意味を考えたりしました。

それから『北斗の拳』とか、漫画がいっぱい揃ってて。あれはお父さんとの共通の趣味みたいだったんですけど。『北斗の拳』とか、あと『鋼の錬金術師』があった。これ全巻、僕も買って読みました。それから、どんな言葉の影響を受けてたか。遺書に、土佐藩の武士の辞世の句が載ってましたよね。岡田以蔵のでしたね。ああいう言葉にもすごく影響を受けてね。武士道とか、人が発した生き方が表れてくるような言葉とか、こういうものにすごく影響を受けてるところがあって。そういう言葉に自分を重ねたりするっていう。先ほども言った、そういう中学生を思い浮かべてください。僕も、そんな中学生だった覚えがあるよね。もしも同級生だったら、あるいは担任の先生だったら、話が合っただろうな。あるいは本を貸しただろうな。あの本、読ませたいとか。そんなことを考えましたね。

残されたものからその人を思うことが供養

そうしていくと、どうやってアプローチしたり、どんな風に残された言葉を読み取ったら良いかという、ヒントがだんだん見えてくるんです。報告書で見ますとね、どんな言葉に影響を受けてたなんていうのを、僕が読み解いたことがあるんです。これは正しいとか正しくないとかじゃなくて、残されたものから精一杯いろんなことを想像して思うってことが、僕は亡くなった人への最大の供養だという風に

考えましたので。

例えば『鋼の錬金術師』っていう漫画の中にはですね、次のような言葉が出てくるんです。「痛みを伴わない教訓には意義がない」という言葉。それと「人は何かの犠牲なしに何も得ることなどできないのだから」というのが出てくるんです。これも兄弟を描いてるんですね。漫画なんですけど。僕はまず読んで、この言葉が繰り返されて、いつもテーマのように、何巻を読んでも必ずここに、主人公の想いが戻ってくるところに気付きました。『クリスマス物語』との関係性も考えましたが、もっと事例が欲しかったので、次々に読んでいくんです。そうすると、一番多かったのが引き出しの中にあつた、歌詞を視写したメモなんです。僕はすべての曲を聞きまして読みました。

調査報告書の18ページに、「歌詞に重ねる自分。自分に重ねる歌詞」として、僕はこのように書きました。例えば「軋んだ想いを吐き出したいの は 存在の証明が他にないから 歪んだ残像を消し去りたいのは 自分の限界をそこに見るから」(『リライト』)。「逢いたくて 愛おしくて 触れたくて 苦しくて 届かない 伝わらない 叶わない 遠すぎて 今はもう君はいないよ」。『月光花』という歌に出てくる歌詞なんです。それから『嘘』っていう歌には、「最後の嘘は優しい嘘でした」というフレーズがあります。僕はこれを見たときに、真矢さんが「遺言」で25人の友達を励ましていることを思い出しました。「お前はこんないいところがあるから頑張れよ」とか励ましてるんですよ、亡くなる人が。僕はそれを見たときに、うーん……と思ったんですね。

「今俺は何を信じて この胸に何を抱きしめて 走るのか 野望を蹴散らす魂の叫び 傷ついた日々の向こうに何を見つめて」とか、「未来に伝える熱い想い」とか、「世界を導く 一

筋の光」。『ソウルテイカー』っていう曲の歌詞ですね。あの……真矢さんじゃないかと思った。

まだたくさんあるんですよ。「期待とは裏腹に 後退する気分」(『IN MY DREAM』)。理想とする自分と、でも人の前に晒してるおちやらけてる、いじられキャラの自分。本当はそうじゃないのにつて思ってる自分。その間で、振り子のように揺れ動く自分。それがよくこの歌詞に出てますよね。

こうやって、詩とか音楽に触れることで、自分の辛い思いとかですね、果たされない思いをですね、重ねて昇華させてたつていうのがありますね。すごく耐えてたんだと思います。こうやって、自分の気持ちを音楽に重ねたりすることで、精神的なバランスを保とうと、必死だったということなんです。

「何もできない自分隠して 本当を失くした」とか「見えないものを見ようとすれば まぶた閉じるそれだけでいい 君がここにいないとしても」。『今宵、月が見えずとも』という曲の歌詞ですね。それから『メリッサ』という曲の中には「救いのない魂は 流されて消えゆく 消えていく瞬間にわずか光る」「悲しみの息の根を 止めてくれよ」って書いてある訳ですね。これを見て、胸が張り裂けそうになる思いでした、僕は。

俺は真矢さんに逢いたいんだ

こういうものが、引き出しの中から出てくるんです。そして僕はこれを聴いて、一緒にそれを感じて、共にそれを感じるという時間を過ごしてる訳ですね。するとどうしても、何とかしてあげたくなっちゃうんですね。何とかしなきゃと。で、間違いなくこの頃の実矢さんの精神的な状況と、彼が読んでた漫画や本や、影響を受けた詩とか歌詞との関係性っていうのは、どう考えても無関係じゃない。

それから、さっきの冒頭で読んだ『クリスマスの物語』は、そのものだ。あのお兄さんは真矢さんですよ。弟は、いじめられていたFさんだ。それはもう明らかに分かったんですね。僕はもう悔しくて。気付いてあげられなくてゴメンなと思った、うん。これを気付いてやって、声をかけてあげれりゃ、変わったのかなと思ったね。もうそれだけでしたね。その想いが毎日の日々だった。だからその想いがですね、生徒さんたちとの面接にも繋がって、生徒さんたちが分かってくれたの、とても。同級生の子たちが。僕がありきたりの質問をしてないことに気付くんですね、途中から。僕が何を求めて、同級生に質問してるかが、分かってくれる人が増えてきて、すごく協力してくれて、「今度もう少し詳しく話したいんで、もう一回面接させてください」とかですね。



自分から言ってくれた生徒さんもありました。とてもありがたかったし、逆に僕は真矢さんにですね、君の人徳だよと思った。君がこの同級生に喋らせてくれてるんだよって。僕は君に感謝をするから、僕は君の通訳者になって、彼らや彼女らに聞くよって思った。そういう気持ちを、絶えず忘れなかった。忘れないように心掛けたのが、僕のそのときの仕事の在り方でした。

本当にこの「部屋をすべて見てください」と言ってくれた言葉は奇跡の言葉で、感謝しき

れないですね。そしてこの言葉は、真矢さんの死と共に生きていくための、僕は「産声」だと思いました。「産声」って終わっていくことじゃなくて、始まりでしょ？始まりだなと思うようにしたんです。

人が亡くなると、命がそこで途絶えてなくなってしまふって思うじゃない。僕もそういう身近な死別を経験してますが、亡くしたばかりのときはそうなんだけど、だんだんね……僕はそのとき、これを「産声」だとしようと思ったの。「おぎゃーおぎゃー」って産まれて。いっぱい出てきたから、読んで、調べたんです。

どんな仕事や人間の営みでも「～ねばならない」ということがあるんだけど、僕は途中で、やりたいこと、自分ができると、僕だからできることって何だろう？って。顔が見える仕事をしなきゃいけないと思ったの。僕の代わりの人が代わってもできることじゃなくて、僕と真矢さんは出会ったんだから、僕と真矢さんの関係性、それから、ご両親との関係性の中で、やることあるはずだと思って。それを含めて自分の使命って何だろうと思ったんですね。「～ねばならない」ことだけじゃなくて「やりたいこと できること」って何だろうって思った。不謹慎かもしれないけど、人が亡くなったのに、やりたいことがあるなんて変かもしれないけど、でもそういう気持ちを僕の中にもつことで、何か違う物の見方ができるのかなと思った。

僕のやりたいことは「俺は真矢さんに逢いたい」んだ。僕は遺影にしか会ったことがないんだけど、誰よりも真矢さんのことを詳しくなろうと思った。誰よりも、真矢さんが何を考えて、どんな生き方を目指してたのか。不器用でも、人の目にはこう写ってたかもしれないけど、でも本当はこうだったって、その生き方を、僕は誰よりも知ろうと思っ

た。知りたかった。それで「逢いたい」って思った。だから僕の夢の中に出てくるんです。大きな家でね、ドアがいくつもあるの。そしてドアから顔を出して、あの人懐っこい顔でね、僕の方を見るの。「おーい」って僕が声をかけるんだけど、ニコニコ笑ってるんだよ。でも、向こうの部屋に行くの。でっかい部屋だなーって思って。誰の家かな？って思って。夢の中には今まで見てきたものがモデルになるらしいんですけど、あれは僕の家でもない。真矢さんのお家の部屋数よりも多いなーと思いつつ。あれいったい何だろう？自然教室の建物かな？とか思ったりしながら、部屋がいっぱいあるところを追いかけていくんですけど。ギリギリまで僕が来るのを引き付けて、フワッと行くんだよね。そのとき本気で怒った、僕。「野球やってるからって、いい気になってんじゃないよ！」と僕、夢の中で言っていましたね。で、ハッとして起きるの、朝。そして僕は南菅中学校に行くんです。

僕の妻は、僕の息子がそのときお腹の中にいましてね。ほとんど家にはいませんでしたが、いつもお腹を撫でながら行ってくるよ、お兄ちゃんのところへ」って、いつも言っていました。だから、僕の息子も真矢君のことを知ってるんだ。

作りたかったのは「生き方報告書」

本当は最初のスライドで出てくるはずのものが、こんなところで出てくるんですが「死亡に関する調査」から「どう生きたのか？」への視点変換を、僕の中でした。これは公にはしなかったんですが、僕の中では「真矢さんの生き方報告書」を作ろうと思ったんです。「生き方報告書」を。そしてその生き方が、必ず次の生、あるいは例えば僕の生に必ず重なるはずだって信じた。信じたんです。そしてそれは、真矢さんの死・生と共に生きると思

じたんです。死と共にじゃないんです。死生と共に生きるということが大事なんです。

いっぱいいろいろなものを読んだり調べてると、さっきもちょっと話しましたが、考え方・理想・願い・生き方を、いろんなものの中に垣間見せてるんです。作った物語の中とか。

かつて国語を教えていた先生、南菅の中学の先生は、真矢さんが、すごく俳句にしても何にしても、共感性が高いものに対して心惹かれることを証言してますね。もう異動した国語の先生でしたが、異動先で聞いたときに「彼が選ぶ詩って他の子とちょっと違うんですよ」って。「何が違うと思うの？」と僕が聞いたら「行間の想像を、読み手が自由にできる。そういう広がりや深みがあるものに、すごく心惹かれるようだ」と。あと、「ストーリー性があるもの。そういうものに、すごく心惹かれる」って言って。あー、本当に会いたかったな、僕は。そんなことを、国語の教師が言っていましたね。だったら……、こんなこと言っちゃいけないけど、あの『クリスマスの物語』を奪い取ってでも読んで欲しかったな、彼に。と思うんだよね。もう、そんなこと言ってもしょうがないんだけど。あれを、あざ笑う中で閉じて欲しくなかったな。うん。

教室の中で、笑いの質がどんな笑いかって、すごく大切なんです。学級を経営するときね、人間って笑ってればハッピーかってい

「死亡に関する調査」
から
「どう生きたのか？」
への 視点変換

うと全然そうじゃなくて、人間の尊厳をぶっ潰すような笑ってある訳で「お前、そこで笑うとこかよ？その笑って何なんだよ？」っていうのはある。それは、笑いの渦の中に入ったら、生徒たちは分からない。だから、そこで理性を発揮して、全体をマネジメントするのは先生しかいない、僕しかいないの。そこで「ちょっと待てよ、この笑ってどう思う？」って問わなきゃ。「この笑ってハッピーかな？君はハッピー？俺は全然ハッピーじゃないんだけど」って。そこでハッとさせないと。「スマイルじゃないよな、これって。あとでスマホで調べてみな」って。「OK グーグル」って言って「『あざ笑う』の英訳お願いします」って言って。「Smile」じゃねーぞ」って。「調べてみな」って。

言葉が区別されるってことは、意味が違うからですよ。真矢さんは漢字にこだわりをもってました。それは「遺書」や「遺言」に出てましたね。例えば、「さいご」っていったときの「さいご」を「期」を使ってきましたね。「後」じゃなくて。「まもる」も、「守る」じゃなくて「護る」を使ってきましたね。このように、言葉に対する物凄い鋭敏な感覚をもっているんです。これはとっても重要なことで、ということは、物凄いいろいろなことに対して気付く子なんです、おそらく。おそらくというか、そうなんです。

でも、僕はどうしてもね、会ったことがないんでね。断定できないっていうのが、僕の弱さです。でも結構近づいていってますよ。自信があるんだ。彼が好きだった音楽を、誰よりも聴いたからね。

真矢さんがどう生きたか 物語を求めて

並べてみると、アニメの歌詞への傾倒。アニメの主人公たちのセリフや言葉への傾倒。辞世の句。名言集への傾倒。メールの言葉もすごく手がかりになって、「メールで気になっ

た言葉があった」なんて証言を、中学生がたくさんしてくれている。その言葉と、彼が残してくれたいろいろなメモとかが、一致することが多々あった。そうすると、今まで出てたことが点だったものが、線として繋がってくるんで、物語が生まれてくるんです。これはとても大事でした。彼がどう生きてきたかって考える上で、物語が生まれてこないとダメだから。

それから「自己紹介カード」。自分のこと、ヘタレ、ヘタレって、自己否定の強い人でした。自分に「Yes」って言わないの。もったいない。これ並んだの見ただけでも、すごい個性的でしょ？十分に魅力的な人ですよ。物語作りに見せる非凡な感覚。褒めどころ満載。塾の生徒たちにも話を聞きましたが、学校で見せる姿と違う姿が見られたりね。そういうこと、とても大事でした。

部活の友達と、アニメの話をする友達とは、話す内容が違う。いつも行き帰り一緒だった友達とは、長く時間を過ごしているけど、歌詞の話とか詩の話とかは、ほとんどしてない。仲の良い友達だからといって、心の深いところを見せてた訳でもない。だから分かりづらいんです、人っていうのは。真矢さんに限らず。

真矢さんは、先ほども言いましたが、話し言葉よりも書いたときの方が思想的なものが出やすいんで、書いたものを本当に見たいなって。「ノートとか文集とか残ってませんか？」って前の先生に聞いたり。すぐくそういうことをしつこくやりましたね。

自己紹介カードの中に、ミドルネームが出てきたのがあって面白いなと思った。「ミラメノス」って。「篠原ミラメノス真矢」っていうミドルネーム。プレイステーションポータブルの「モンスターハンター・ポータブル 2nd.G」の武器アイテムの一つが「ミラメノス」。何のことか分からなかったの、最初は。でも調べた

ら「ミラメノス」っていうのは、「多人数プレイでの防御における仲間へのサポート効果が高く、その点で類を見ないと評価されている」っていうのが分かったんです。僕はもう、何でもそこに結び付けてしまうんで、やっぱり仲間を助けようとしてたとか思っちゃって。ある人は「あんたはいつもそこに結び付けよとしてるんだな」って言ったんですけど、僕はもうそこしかなかったんですね、この時期は。ゲームやってるときも、人を救おうとしてたのかと思ったりして。本当は本人に聞いたら「渡邊さん、そんなことないよ。たまたまだよ」っていうかもしれないけど、僕はそう思いたかったんだろうね、きっと。僕は。うん。手がかりが欲しかったから、どんな小さなことでも。

122名の聞き取りを自分一人で

最初はいろんな指導主事が生徒から聞こう、分担しようって話だったんだけど、人によって聞き方が違うし、関係性も変わる。そうするとやっぱりいけないので、僕は全体的な調査の中心でしたから、僕一人に聞き手を絞ったんです。時間はかかるけど。でも一日に何人も、何時間もやりましたね。生徒だけで70何名聞いたのかな。先生たちも合わせて全部で122名くらい話を聞いたんですけどもね。

長い子は一回で6時間とか7時間、話しにくる女子生徒がいました。スクールカウンセラーに相談に行ったら、「あなたはありのままでもいいのよ」って言われて、そしたらそのあと怒って僕のところに来て、「ありのままの自分じゃ嫌だから相談に行ったのに、ありのままでもいいって言われて、腹が立って来ました」って言って、そこから7時間くらい僕に話してくれました。お家の方から心配して電話かかってきましたけど。

でもそういうお子さんが、なんとかしたい

なって思ってくれたのね。その女の子は唯一、先生に「いじりがいじめだ」って言った子どもと分かりました。「あのいじりは、酷いです」って先生に言ったの。先生が真矢さんに聞いたら「大丈夫です」って言った。大丈夫じゃないのにね。子どもの「大丈夫」は、信じちゃダメです。「大丈夫」って言ったら、「本当に君の父母に誓っても大丈夫？」って。「大丈夫です」。「じゃあ、君の父母の父母に誓っても大丈夫？」って。「大丈夫です」。「じゃあね、しつこいようだけど、君の父母の父母の父母の。その顔も知らないような父母たちに誓っても大丈夫だって言いされる？」って言ったら、ちょっと動揺するんです。「先生しつこいなあ」って言った目が、泳ぐんです。「今、目が泳いだよね」って。「ちょっと場所を変えようか？」って、そのとき場所を変えるんです。するとポロっと言っちゃったりする。「ちょっと校庭歩こうよ」「ちょっと僕の手伝いしてくれない？」とか言ったときに、「さっきの話だけどさ」とか言うのと、ポロっと出るかもしれないですね。

僕の昔の生徒で、今は30何歳かの書道の大好きな西尾さんという人がいます。ヤマハの銀座店で働いてますが、西尾さんがいたら、皆さんどうぞ宜しくお願いします(笑)。その西尾さんのお母さんから面白い話があって、娘に「ん？」と思ったことがあったら「飲み会に行こう」って言って誘ったそうです。小学生ですよ。なんてことない、マンションのそばに自動販売機があるんですけど、もう一個遠い自動販売機まで散歩に行くんですって。一番近いところだと近すぎちゃうから話が終わっちゃうでしょ。二番目に近いところに行つて、「ちょっとジュース買いに行く。じゃあパパ、ジュース買いに行ってくるね、二人で」って言ったら、お父さんも分かっているから「行っておいで」なんて言って送り出すんですって。

で、行くでしょ。そしたらベンチがあるの。マンションの敷地の中にね。そしてベンチに座りながら飲んでると、ボソボソって娘が話すんだって。これ「飲み会」って言ってたそうです。いいでしょ？

「なんか悩みごとがあるなら、話してみなさい」って言っても話さない。なんとなく、ぼわ〜んとしてたり、「ちょっと手伝ってね」とか、「ちょっとさ、俺の力になってくれない?」とか言いながら話していくと、ポロっと態度に出たり、「ちょっとなんか気になるな〜」なんて言ったりして。すると、ふと何か出てくる時がありますね。なかなか「相談があります」なんて、生徒は言ってくれません。何か表情がふとおかしかったり、行動がいつもと違ったり、いつもこういう反応をするのにいつもとは違う反応があるとか、あるいはちょっと学校に来るのがいつもより遅くなってしまったり。何らかの変調が出てきますから。ブックレットにも出てますよね？相談だけとは限らないという。行動的な変調とか、休みがちになるとか。そういうことで何か変化が表れてきますから、気にかけていくというところが、あると思います。普段よりも、3パーセント、5パーセントくらい増量して、声をかけてみるとかです。あんまりわざとらしくやらないで、やっていくということだと思います。

15年間の人生を全うした篠原真矢さんへ

こうやって、だんだん何を考えて生きてきたかとか、どんなことに悩んでたのかということが分かってくると、唯一無二の、一つの命の篠原真矢さん、中学生、15年間の人生を全うした一人の青年がいたということに、敬意をもちます。で、僕の告白です。僕はあなたに会ったことはありませんが、あなたの担任になって「自分魂」の表彰をしたいと、ずっと思ってた

した。僕はこれを「真矢魂」と呼んでいます。「真矢魂(らしさ)」。「魂」のところに「らしさ」という言葉が付くんです。

あなたを褒めます。

言葉の引用や、短い言葉の感覚に優れ、正義感を心の奥にたたえながら、平安で笑顔にあふれる世界を願う、感性の純度の高い人。

繰り返します。

言葉の引用や、短い言葉の感覚に優れ、正義感を心の奥にたたえながら、平安で笑顔にあふれる世界を願う、感性の純度の高い人。

僕は、真矢さんはこういう人だと思う。僕は面談した生徒の保護者たちに、「渡邊信二魂」とか、「〇〇魂」とか書いて、こういう風にコメントを渡すことにしてるんです。今日は真矢さんに渡しましょう。

詩や歌詞に対する感応に優れている。繊細な感度の高さがあって、自分の心情や考えに作品の魅力を重ねる力に富んでいます。また、気になる歌詞や詩があると、放置しないで書



き留めたりメモしたりする習慣があるので、「言葉のノート」とか「言葉の貯金帳」などと銘打って、メモの集約をすることをお勧めします。これは担任のつもりで書いてるんですよ。というか、担任になってるんです。機会があったら、まとめて読ませてください(実は、僕の楽しみでもあります)。

引き出しの中にちょよちょよと入れてたか

ら、もったいないよね。あれ、ノートにペタッと貼るだけでいいよね。付箋を活用すると、もっと良いかもしれない。と思ってる。そういうことを教えてあげたくてね。

あなたの言葉への感度の高さには共感します。「守る」ではなく「護る」ですね。「まもる人」の意志がより強く感じられるのは「護る」です。例えば憲法を「まもる」のは「護る」です。人の生き方や尊厳の場合にもこの「護る」がふさわしいです。そこには願いや決意が、みなぎっているのです。真矢さんの人柄や人間性の特徴が、垣間見えるようで好きです。

僕はあなたが読んだ本や書いたメモ、小さな物語も読みました。聴いていた音楽やその歌詞にも共感しました。

自分の行動で、課題や問題を少しでもより良くしようと試みていますね。それはある意味、自己犠牲を伴います。それを受け入れつつ、自分を鼓舞したり昇華したりするのに、言葉や音楽の力、そして表現・創作する力はとても大切です。人間の死生の証明ですから。

12月17日の「クリスマスの物語」は、あなたらしいと思って、胸の中がほっこりしました。物語や登場人物、そして言葉の中に「今の真矢さん」が生きていました。だから、聞き手たちが、「またシノがキャラを發揮しているよ」みたいな空気が広がったとき、これはよくないと思って、あなたに代わって、この

物語を読むことに決めたのです。打ち合わせもなく、ごめんね。でも、僕の朗読で、多くの人が気付いたはずですよ。篠原さんの純度の高い優しさと、不器用だけれど大切なことはいい加減に扱わない人だ、ということ。僕はああいう偏見や決めつけが大嫌いです。ときどき「通訳者」になって、世間に本当のことを伝えるのも僕の仕事なのです。

今度、上野の国立科学博物館の「昆虫展」に行ってみようよ。思考力もなく自然に生きている昆虫の世界の、多様性の権化のような世界をのぞいてみたい。それなのに、高度な思考力をもつと言われている人間が、その多様性に対して鈍感になってしまっているのです。

今こそ、僕たちの出番だよ。この世界の片隅に、純度の高い感性が萌芽し続ける限り、人間はそう簡単に滅びないのだと信じたい。これからも、共に生きよう。君の力も借りて、ね。僕には、真矢さんに紹介したい本や言葉、詩、音楽、絵、彫刻、写真などがたくさんあります。今度、とっておきの絵本を贈ります。待っていてください。

2018年8月4日。夢の中で君の走力にいつも追いつけない、元・名センターバック、渡邊信二より

僕、高校のときラグビーやってたんです。これを、ご家族にお渡しします。

もしも。「思考のif」を大事にしよう

僕は今、東菅小学校で6年生の担任をしますけど、よく授業で使うのが「思考のif」というものです。「if」というのは「もしも」ということです。もしも、僕が真矢さんが2年生のときの担任だったら。もしも、3分間スピーチのあの笑いを僕が感じたら。もしも、真矢さんが僕の息子だったら。もしも、自分の自宅で自分の息子が自分の命を絶ったら……。



この「if」を大事にしようと、僕は生徒にいつも言ってます。ある物をなくしてみる。ない物がある物にしてみる「if」もできる。そういうことを、いつも忘れないようにするんです。これは、テクニックのように見えるけど、人間の生き方に根ざしたハートフルな体温のあるものです。何であんな『クリスマスの物語』を読んで、笑われなきゃいけないのかなって思った。僕が一番悔しい。僕の朗読を笑った人は、今日誰もいなかった。僕たちは「if」を「想像力」と呼ぶんです。子どもたちは分かっていると思ってることを、具体的に砕いて伝えなきゃいけない。「思考のif」は想像力を膨らますための、一つの方法、手段です。

僕には、忘れられない場面があるんです。それは、真矢さんが収められた棺の蓋を閉める瞬間です。真紀さんが、蓋を閉めるのが納得できなくてね。すごく時間がかかったの。認められなくて、死を。僕は、あの場面を絶対忘れない。これからも。

僕はまだご家族との関係性を作る前だったから、棺のすぐそばに行けなかった。離れたところから、その様子をずっと見てた。蒸し暑い日でしたね。僕は、あの場面を絶対忘れない、これからも。

僕は教員ですから、子どもたちがいろんなことを考える術を、一つひとつ生きる「翼」として、授けたいと思っています。それは、テクニックや技術・技ではなくて、もっと人間性に根ざした物でなければダメです。「あの先生だからできた」、「このクラスだからできた」、「あの学校だからできた」。それでは、育ちではないのです。人が替わっても、環境が変わっても、大切なもの、種を蒔いている。一人でも多く、そんな大人になって欲しい。僕の教育の理念です。

そして、誰もが生まれたときに、「おめでとう」って言われるんだけど、同時に「死に進んでいく

生」を獲得したと思います。誰でも生まれた瞬間に死を背負うんです。「生き方」の本が何であんなに売れるのに、「死に方」の本が売れないんでしょうね？僕の家には何冊か、死に方を考えようとか、どう死んでいくのかとか、そういう本があります。

実は僕は今、教員やりながら学生もやってましてね。死生学とかグリーンケアを勉強しています。きっかけは……きっかけの多くは、真矢さんです。真矢さんと出会ったことが、僕に学ぶことの大切さを教えてくれました。大変ですね、二刀流って。働きながら論文書いたりするの。こんなに大変だとは思いませんでした。でも頑張ります。落第ギリギリなんですけどね（笑）。妻は「何年かかっても卒業しなさい。お金がもつ限り」と言っていましたけど。そう言われると「くそ一つ」と思いますね。頑張んなきゃと思います。「真矢さんの死生は、僕の死生の中に共に在る」と思ってます。これは綺麗ごとじゃなくて、本気でそう思います。本気で思います。

真矢さんの死生に触れて僕の死生が膨らんだ

2010年の6月7日、真矢さんが亡くなられた年、その卒業式のあとだったですよ、東日本大震災があったのは。僕の母が3月7日に亡くなってらるんですね。で、僕の子どもが2月2日に生まれてる。妻の母は福島県の南相馬なんです。僕の母が亡くなったあと、11日に私の妻と義理の母の故郷が、津波と放射線に襲われたんですね。

妻が、荒れ果てた故郷を、赤ん坊だった僕たちの子どもを連れて周ったときに「『被災者』とか『被災地』っていうのがあるなら『非被災者』と『非被災地』っていう言葉を、言ってもいいの？」って言いました。例えば僕は、東京都の稲城市っていうところに住んでるんですが、被災地じゃないでしょ？すると「非被

災地」とかって言われたことないのね。「渡邊さん、非被災者ですね」って言われたこともないの。変な言い方なんだけど、さっきみたいに「思考のif」を使うと、反対側の「if」でもし逆のことを考えると、変なことが分かるんですよ。と考えると、私たちが悪気なく言ってることで、とつても人を傷つけてることって、多分僕にもたくさんあるんだと思う。そういうことを、もつときちんと考えていかなきゃいけないんだと思ってるんです。

終末医療で知られる聖路加病院の日野原重明さんは、晩年「いのちの重なり いのちの膨らみ」と言っていました。この言葉を僕は教室でもよく使うんですが、誰かの命が誰かの命と重なって膨らむってことです。

僕が篠原真矢さんと出会って、篠原さんの死生に触れてですね、僕の死生が膨らんだんです。つまり、命が重なったって感じてるんです。会ったこともないのに。これはとても僕にとって重要な経験です。真矢さん聞いてるかな？どこかで。真矢さんの命と僕の命が触れて、僕は膨らんだの。とても。そのことが、今日一番言いたかったこと、ここで。だからお礼を言いたいです、「ありがとう」って。日野原先生、良いことを言いますね。

そして、それはさっきの「産声」ではありませんが、始まりなんだと。死は終わりじゃなくて、始まりなんです。だから、真矢さんも「死」って言い方をしないで、僕は真矢さんの「死生」って言い方を、すごくこだわります。真矢さんが言葉にこだわったように、僕もそういうことに、こだわっていかなきゃいけない。大切なものを大切にしなきゃいけない。

いっぱい喋りたいことあるんですけど、時間は限られてますね。最後に一つ。

6月7日の命日に、僕と一緒に篠原さんのお家に真矢さんに会いに行く人がいます。そ

れは、当時の川崎の教育長、金井元教育長です。お喋りです。ずっと喋ってるんですよ(笑)。真矢さんの遺影がリビングにあってね、いっぱい写真があるんですよ。同級生の手紙とか、後輩からの手紙とかがいっぱい飾ってあって、賑やかなんですよお部屋が。もう、幸せいっぱいなんです。そこでね、ずーっと一時間半から二時間、喋ってるの。で、真矢さん見たら笑ってるの(笑)。「お喋りなおっちゃんだな〜」って言って。本人に言ったら、怒られちゃうかな？仮にも昔、僕の上司ですからね。

金井元教育長がいつも言うんです。帰るときに僕のおんぼろ車に乗って、登戸の駅まで一緒に行く車の中で「なあ、渡邊さん。不思議だよな。本当は俺たちがさ、篠原さんご夫妻を励まさないといけないのに。なんか不思議だよな〜、俺たちが元気になってないか？俺たちが家を訪問するとき、元気になって帰ってるよな。変な話だよな〜。不思議だよな〜。でも嬉しいよな〜」っていつも言う。で、また車の中で一人でずっと喋ってるんですよ(笑)。

真矢さんの命に触れて、僕の命は膨らみました。僕を大学院生にまでしてくれた、落第ギリギリの。そして今は、宏明さんと真紀さんが、それを引き継いでるんです。だから、二人に会うと元気が出るんです。それは日野原重明先生が言った、命に触れて命が膨らんでいくってこと。まさに、二人はやってるの。これはときどき思うんだけど、真矢さんの死生が生きてるのね、ちゃんとね。それはすごく感じる。

本当に出会えて、僕は調査委員会のメンバーというよりも、一人の人間として、出会いに感謝いたします。そして、これからもこんな僕ですが、お付き合いいただければと、思っただけですが、今日は来ました。どうもありがとうございます。

皆さん、僕のこんな個人的なお話ですが、聞いてくださってどうもありがとうございました。

遺 書

お父さん、お母さん、お兄さん、お婆ちゃん、先立つことをどうかお許し下さい。

俺は、「困っている人を助ける・人の役に立ち優しくする」

それだけを目指して生きてきました。

でも、現実には人に迷惑ばかりかけ、F (友達の実名) のことも護れなかった…

それに俺には思い出が多すぎました。

こんな俺が、人並みに生きて、友達を作って、人生を過ごしていく…

そんな事があっていいはずないんです。

俺がいて不幸になる人は多勢いる。それと同時に俺が死んで喜ぶ人も

多勢いるはずです。

でも、俺はFをいじめた、B、C、D、E (加害生徒4人の実名) を

決して許すつもりはありません。

奴等は、例え死人となっても、必ず復讐します。

でも、この十四年間楽しいこともたくさんありました。

春は 桜が出会いを運び 夏は 花火が夜空に消えて

秋は 紅葉が空をも染め上げ 冬は 白雪が乾いた心を潤す

季節が過ぎていく中で色々ありました。それが全ての思い出となって心に残っています。

家族のみんなにはお願いがあります。

1つは、自分達をどうか責めないで下さい。

俺が死ぬのは家族のせいじゃありません。俺自身と、Fをいじめた連中が悪いんです。

大丈夫。ある日は日の光となり、ある時は雨となって、あなた達の心の中で生きています。

だから哀しまずに、俺の死を糧として、全力で生きて行って下さい。

2つは、俺の臓器が無事だったら、それを売ってお金にしたり、お婆ちゃんや爺ちゃんの治療

に使って下さい。それが俺に出来る唯一の罪滅ぼしだから…

そして赤青のバットینگ・グローブは形見にして下さい。

今まで本当にありがとう そしてさようなら

～君がため 尽くす心は水の泡 消えにし後は 澄み渡る空～

友人F君へのいじめ、篠原真矢さんへのいじめ、自死、事後対応の経過

①	2年生	F君へのいじめ	5月頃から友人F君へのいじめが始まる。同じクラブチーム(野球)に所属する加害生徒2人を中心にいじめが始まり、最終的には4人からのいじめを受ける。
②	2年生秋頃	真矢へのいじめ	友人F君をかばううち、加害生徒4人から「いじり」と称されるいじめ(叩く、蹴る、ズボンおろし等)が始まる。
③	2年生秋頃	個人面談	担任より「真矢君はいじられキャラですね。クラスの女の子から篠原君が可哀想という声を聞きました」との発言がある。 「いじられキャラ」という言葉に違和感はあったが、真意は理解できなかった。
④	2年生3月	母への告白	真矢の様子がおかしいので問いただすと「友達のF君がいじめにあっている。相手は4人で、そのうちの2人はF君と同じ野球クラブのチームメイト。平日は俺が見てやれるけど、土日は何をされているのか分からない。あんな良いやつをいじめるなんて許せない」と泣きながら話す。
⑤	3年生 4月22日	家庭訪問	「F君がいじめにあっていると真矢が心配しているので、よく見ていてください」と母親が担任に伝える。
⑥	5月24日	教科書事件	担任より「真矢君がクラスメイトE君の教科書をさきみで切ってしまいました。積もるものがあつたようです」と電話あり。帰宅した真矢に問いただすと泣きながら、EがF君をいじめていることと、他にB、C、Dの3人の名前を挙げる。その夜、Eの家へ謝罪の電話を入れ、翌日教科書を購入、真矢に持たせる。「言いたいことはきちんと相手に言いなさい。そうしないと相手は直らない。このままだと真矢が悪者で終わるよ」と言って学校に送り出す。 帰宅後、真矢に状況を聞くと「あんなヤツに何を言っても無駄。早く終わらせたかったから、うわべだけ謝ったよ」との事。それ以上は聞ける状況ではなかった。
⑦	5月末日	自殺準備	ネット通販で除草剤を着日・時間指定(6月7日午前)で購入手配。洗剤(溶剤)を店舗で購入。
⑧	6月4～6日	修学旅行	最後の思い出作りだと思ったのか、現地では必要以上にハイテンションだったとの事。
⑨	6月7日	自殺当日	修学旅行翌日の代休(月曜日)。自宅には真矢と祖母のみ。午前中、代引きで手配してあつた除草剤を本人が受取る。 昼食後、パソコンのメールで友達数人に、最後のさよならメールを送る。 その後、自宅1階トイレに籠り内側から鍵をかけ、目張りのためガムテープを貼り、硫化水素ガスを発生させる。 17時頃、母親が帰宅。トイレのドアには「毒ガス発生。扉を開くな。高濃度の硫化水素が発生しています。即死するので絶対に扉を開けないでください」の張り紙。すぐにドライバーで鍵をこじ開け、中で倒れている真矢を発見。救急搬送するも既に死亡しており、19時49分死亡確認。 検死の結果、薬液が胃の中から見つかる。硫化水素ガスを吸っただけでなく、薬液を飲んだことが分かる。おそらく即死であつただろうとの見解。 トイレから「俺自身と、友人Fをいじめた4人を絶対に許さない」と書いた遺書が発見された。後日、警察の捜査により、部屋の机の引き出しから、複数の友人に宛てた遺言が発見される。
⑩	6月11、12日	通夜 告別式	200人以上の生徒、保護者が参列。多くの方の弔問をうける。
⑪	6月中旬～	学校側との対話を開始	遺族、F君の両親を含む約10名の支援者と同行し、週に一度、学校側との対話を開始。学校側には現状報告の他に、真相の究明、F君の保護、加害生徒への指導・教育を要望するも、進展せず。同時期、外部からの招聘者を含む10人程度による「調査委員会」が発足。

⑫ 7月7日	加害者の対応	学校長から、加害生徒の4家族が代理人として弁護士を立てたことを聞く。訴訟対策? (真意は不明)
⑬ 7月中旬	学校側との対話を中止	約1ヶ月間、全く進展しない不毛な話し合いに業を煮やし、学校側との対話を中止する。代わりに、進捗状況を週に一度報告することを約束させ、その報告は調査委員会メンバーである市教委の2名より受けることになる。
⑭ 7月24日	中間報告	調査委員会による報告書の中間報告を受ける。いじめの内容が明らかにされる。叩く、蹴る、肩パンチ、名前を呼んで振り向きざまにビンタ、集団で押さえつけての下着おろし等。
⑮ 7月31日	被害届提出	麻生署の刑事6名が来訪。被害届を出すよう薦められる。昨年2月に発生した、加害生徒4人による「パンツおろし事件」が立件できそうだとの事で被害届提出。
⑯ 8月25日	書類送検	加害生徒4人のうち3人を「暴力行為処罰法違反」の疑いで書類送検。当時13歳だった1人を非行容疑で児童相談所に通報。
⑰ 8月28日	最終報告	調査委員会による46ページにおよぶ詳細な調査報告書が完成。最終報告を受ける。いじめの事実だけでなく、両親の知らない真矢の性格、心情、自殺を決心するまでの心の揺れにも言及。いじめと自殺との因果関係は認められなかったが、いじめの事実、それが自殺の原因の一つであったことを認定。学校組織、生徒指導上の問題点など、学校におけるさまざまな課題、改善点についても書かれていた。
⑱ 12月4日	要望書提出	報告書で指摘された学校体制の改善策が一向に進展しないため、F君の両親との連名で、学校に要望書を提出する。①被害者であるF君の保護、②加害生徒4人の教育と指導、③生徒たちへの教育と心のケア。 要望書提出の際には、立会人として報道各社に声をかけ、同席していただいた。
⑲ 12月11日	回答書受理	2度の手直しを経て、回答書を受理。 ①時期的にクラス替えは無理。そのため、F君と加害生徒たちは、卒業するまで同じ教室で授業を受けなければならないという異常な結果となる。 ②週4時間の別室での個別指導の実施。 ③絵本「しらんぷり」を用いたいじめ学習、湘南DVサポートセンターの「いじめ防止プログラム」の実施。
⑳ 1月15日	審判開始決定	書類送検された加害生徒3人の少年審判開始が決定される。
㉑ 3月3日	処分の決定	加害生徒3人に、保護観察処分(半年間程度)が決定。 この処分がおりたことで、訴訟回避の最終決断をする。
㉒ 3月9日	卒業式	真矢の代理で、兄が卒業証書を受取る。遺族も遺影を持って列席。加害生徒4人は卒業式不参加。 答辞の最後、生徒会長(真矢の友人)が「シノ(真矢の愛称)、一緒に卒業しような!」と、台本にない言葉で呼びかけてくれた。 この卒業式を期に、真矢の実名と顔写真を報道各社に公開した。

「生き方報告書」に感謝をこめて

篠原 宏明

それは、あまりにも突然の出来事でした。

「真矢が死んだ?・・・」

その瞬間、すべての思考が停止しました。

「なぜ真矢は死ななければならなかったのか?」というたった一つの疑問に対してさえ、何も答えてくれない学校に苛立ち、それからの日々は、辛さよりも怒りという「負のエネルギー」に、支配されていたように思います。それは、教育委員会に対しても同じでした。

「調査委員会を立ち上げ、私たちが調査します」と言ってくださった渡邊先生にも、当時の私は数々の暴言を吐いたように思います。

でも、渡邊先生はそんな私の苛立ちや無茶な要望に対して少しも臆する事なく、常に寄り添い、励まし、時には共に涙してくださいました。毎週のように我が家を訪れ、私の知らない真矢のエピソードを語ってくれる渡邊先生。

いつしか私たちと渡邊先生との間には、戦友ともいえるような深い友情が生まれました。「この人にすべて委ねてみよう」、そう思えるようになるまで、そんなに長い時間はかかりませんでした。

真矢が何に苦しみ、何に絶望し、なぜ死ななければならなかったのか。渡邊先生が作り上げた「調査報告書」、いえ真矢の「生き方報告書」で、私は私の知らなかった本当の真矢の実像を、知ることができました。今では、真矢が夢見た「いじめのない世界」の実現に向け、渡邊先生と一緒に発信し続けていく立場にならせていただきました。

突然の息子の死から一歩も動けなかった私を立ち上がらせてくれたのは、渡邊先生をはじめ、多くの皆さまが支えてくださったお蔭です。このような心ある方々の対応がレアケースとならないよう、これからも声を上げ続けてまいります。

篠原 真紀

変わり果てた真矢に「なにがあつたのよ!!」と叫びながら心臓マッサージをしました。突然、最愛の息子が死んでしまったのに、私にはその理由が分からなかったのです。

「なぜ死ななければならなかったのか?」を知りたいという私達遺族の唯一無二の願いを、懸命に調べてくださったのが渡邊先生でした。

大人不信に陥っていた真矢の友人たちも、渡邊先生の熱意とお人柄が伝わり、たくさん協力をしてくれました。

何より「真矢を知りたい」という思いが彼らを動かしたのだと思います。

実際に14歳の真矢の事は、母親である私よりも渡邊先生の方がずっと深く分かってくださっていると思います。いや、真矢になろうとしてくれたと言った方が正しいかもしれません。

そんな先生が作ってくださった「真矢の生き方報告書」には、私の知らない真矢が書かれていました。思春期で、母親の私にはつっけんどんな態度だったのに、友達思いの優しさあふれる子であったという事を知りました。

その優しさと、真矢なりの正義が、苦しみに変わり追い詰められていったことが分かりました。

私は「調査報告書」は亡くなった子のためのものだと思っています。何に苦しみ、傷つき、なぜ死ななければならなかったのか。声なき声を聞き、尊厳を護り、その子がどう生きてきたかを伝えること。その子の発せない声に替えて文字にしたものであること。

私は、そんな報告書をいただきました。

最後に一つだけ思うことは、真矢が渡邊先生の生徒だったらよかったのに……ということです。きっと良いところを見つけて最大限に伸ばしてくれて、今でも輝いて生きていることでしょう。

～ここから未来 理事の本～



『子どもとまなぶ いじめ・暴力克服プログラム』

武田さち子 著 合同出版

いじめ・自殺のないクラスづくり、学校づくりをめざす、すべての人に。大人と子どもがいっしょになって、いじめとは何かを理解し、どうすればいじめをなくすことができるか考えるためのプログラム。

『わが子をいじめから守る 10 力条』

武田さち子 著 WAVE 出版

親が陥りやすい、いじめ対応の落とし穴を回避し、徹底的にわが子を守るための本。子どもを亡くしてしまう前に、ぜひお父さん、お母さんに読んでもらいたいです。



『あなたは子どもの心と命を守れますか！』

武田さち子 著 WAVE 出版

1986年から2003年までのいじめ事件を中心に、子どもたち、教師、親の対応を分析。

あわせて、子どもたちを守るための提言をおこなっています。

『もしかして、いじめ?と思ったときに読む本』

武田さち子 著 一般社団法人 ここから未来

「いじめのサインの見つけ方」に始まり「問題点の整理の仕方」、「いじめ防止対策推進法の活用」まで、いじめ被害解消に役立つ情報を簡潔にまとめています。ここから未来ブックレットの第1弾。



『問わずにはいられない—学校事故・事件の現場から—』

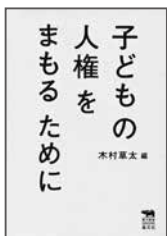
21の被害者家族 著 田原圭子 編 あうん社

いじめや事故・事件等の被害者・遺族ら21家族が、わが子に思いをさせた文集。「はじめに」武田さち子/「わが子の死から学び気付かされたもの～川崎市立中学校 いじめ自殺事件」篠原宏明・真紀 収録。

『指導死』

大貫隆志 編著 武田さち子・住友剛 著 高文研

学校の指導が適切であったなら、子どもが死ぬことはなかったはず。学校での指導後に子どもが自殺した「指導死」の遺族たちが手記を寄せ、教育学者がその「指導」の背景を探る。



『子どもの人権をまもるために』

木村草太 編 晶文社

虐待、貧困、指導死、保育不足など、さまざまな人権侵害から子どもをまもるために、いまおとなにできることはなにか。

「指導死～学校における最大の人権侵害」大貫隆志 収録。

『ブラック校則—理不尽な苦しみの現実』

荻上チキ・内田良 著 東洋館出版社

校則の全国的な調査から見えてきたのは、生まれつき茶・金髪の高校生の2割が黒く染めさせられている「ブラック校則」の現状だった。「命を追いつめる校則」大貫隆志 収録。





『クリスマスの物語』から読み解いた
篠原真矢さんの自死の背景

2019年3月31日 第1版1刷発行

編集：ここから未来 Keynote 制作委員会

編集・デザイン：大貫隆志

発行者：大貫 隆志

発行所：一般社団法人ここから未来

165-0026 東京都中野区新井 4-4-5-304

coco-info@cocomirai.org

<https://cocomirai.org>